

Title	アメリカ南部プランテーションにおける奴隷管理と奴隷資産： 東部海岸地域のプランターの経営について
Sub Title	Slave management in the old south : cases of Chesapeake plantations
Author	柳生, 智子
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1999
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.92, No.1 (1999. 4) ,p.191- 216
JaLC DOI	10.14991/001.19990401-0191
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19990401-0191

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカ南部プランテーションにおける 奴隷管理と奴隷資産

— 東部海岸地域のプランターの経営について —

柳 生 智 子

はじめに

本稿の研究対象は南北戦争前（アンティベラム期）19世紀のアメリカ南部におけるプランテーション経営についてである。南部の中でも東部海岸地方に位置するチェサピーク湾岸地域、タイドウォーター地域のプランテーションを取り上げる。

この地域は南部で最も早く植民が進み、植民地期は本国との関係が特に密接であった地域でもある。18世紀初頭までには主要輸作物（ステープル）であるタバコを奴隷労働を用いたプランテーション経営で大量生産し、対ヨーロッパ貿易によって同地域の経済基盤を確立し、裕福なプランター・ジェントリが地域社会を支配する体制が成立していた。しかし、18世紀末までに事態は次第に変化を来し、長年の無計画な農法の採用、ステープル生産の低迷、有閑的経営等により、多くのプランターが経済的困窮に喘ぎ、経営再建の選択に立たされることになる。新たに合衆国最大の輸作物になった綿花生産に従事するため西部フロンティアの綿花地帯に移住するののひとつの手段であったが、本稿では西部へ移住したプランターではなく、アンティベラム期を通して東部海岸地域に留まり、経営再建を模索したプランターの個別の事例を検証する。主にプランターの会計記録（Account Book）の記録を元に、事実の再確認・発見を通して同時期のプランターの経営状況について考察する。⁽¹⁾特にプランテーション経営に最も影響力を持った「奴隷」の扱いに注目し、第3章では労働力としての奴隷の職種の分化構造について、第4章では奴隷の資産勘定と賃貸・売却について分析する。

(1) 本稿で用いる会計記録は Maryland Historical Society（以下、MHS）及び Southern Historical Collection, University of North Carolina Chapel Hill 校（以下、SHC）所蔵のものである。

第1章 研究史

まず最初にこれまでの研究史を概観する。アメリカ南部と奴隷制度についての研究は20世紀初頭に始まり、これまで多くの研究の蓄積がある。南部史研究の出発点ともいえるフィリップスの業績は奴隷制度に支えられたモノカルチャー経済の内部矛盾を指摘し、奴隷制度が経済的に非効率で、南部経済の発展を遅らせる原因となったこと、また収益性も低く、奴隷制度を存続させる経済的重荷から自ずと制度は崩壊したという主張であり、長きに渡って支配的な解釈、伝統的解釈であるとされてきた。⁽²⁾

フィリップスの見解に反論する主張は1930～50年代に登場し始める。今日でも南部農業史の最も完成された概説書であるグレイの大著、更にスタンプの著作等はフィリップスの主張を覆し、奴隷制度そのものの収益性の高さ⁽³⁾と有益性について言及した点で画期的であった。また同時期のバンクロフトは初めて東部から西部への奴隷移動に関する研究を発表し、開拓の進む西部綿花地帯の奴隷労働力需要の高まりに応じて移動した奴隷の移動形態は、主に奴隷取引商人(トレーダー)による売却によるものであったことを主張した。ここでは、東部海岸諸州は奴隷供給に特化したブリーディング・ステイツであったとされ、奴隷の南部内再生産を行うため、東部と西部はそれぞれ「奴隷売却地域」と「奴隷購入地域」に分離されていたことが主張されている。⁽⁴⁾

1950～70年代の研究は伝統的解釈の修正と並行して計量的分析が大勢を占めた。ジェノヴィースやガットマンらの研究は、後の社会史的アプローチによる研究の先駆けとなり、またコンラッドとマイヤーによる最初の計量的研究は、東部海岸地域の奴隷の組織的生産を前提に、奴隷制度の有益性、存続可能性について主張し、同様の計量分析はエンゲーマンとフォーゲルの大著を生んだ。⁽⁵⁾ またタッドマンはバンクロフトの奴隷移動についての研究を更に前進・補強する見解を発表している。⁽⁶⁾
⁽⁷⁾

(2) Phillips の南部プランテーション経済・社会、奴隷制度への見解について Phillips, U. B., *American Negro Slavery* (New York, 1918), *Life and Labor in the Old South* (Boston, 1929) を参照。伝統的解釈に立つものとして Ramsdell, C. W., "The Natural Limits of Slavery Expansion" *Mississippi Valley Historical Review* Vol. XVI (Sept. 1929) も合わせて参照のこと。

(3) Gray, L. C., *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*, Vol. 1, 2 (Gloucester, 1933).

Stamp, K., *The Peculiar Institution ; Slavery in the Ante-Bellum South* (New York, 1956).

(4) Bancroft, F., *Slave Trading in the Old South* (New York, 1931). なお、「南部内再生産」の形態は、1808年に奴隷貿易が禁止されて以降、必然的に取られていったと言われている。

(5) Genovese, E., *The Political Economy of Slavery ; Studies in the Economy and Society of the Slave South* (New York, 1965), *Roll, Jordan, Roll ; The World the Slaves Made* (New York, 1972), Gutman, H., *The Black Family in Slavery and Freedom 1750-1925* (New York, 1976).

南部経済と奴隷制度研究の主流においては、南部経済が立脚した奴隷制度の効率性の検討と奴隷移動の形態について様々な角度から分析が進み、奴隷制度が南部にとって有益であり、西部から東部への奴隷移動の形態は売却の形が多く、東部海岸地域は西部への奴隷売却地域であったという認識が定着している。

本稿の研究領域である東部海岸地域の研究については、植民地期を中心とした本国との関係史、タバコ経済圏、個々のプランテーションの事例研究などが1970～80年代以降、見られるようになる。クリコフの研究は郡レベルでの財産目録 (Inventory)、土地記録 (Land Records) を駆使し階級・人種・性の3要素を含めて社会史的解釈を持ち込み、タバコ経済圏の研究に新たな視点を加え、更にメナード、ウォルシュ、モーガンらによって奴隷労働力を含めた植民地期のプランテーション社会⁽⁸⁾についての体系的な研究成果が多く発表されている。しかし、19世紀アンティベラム期後半の同地域の研究は決して多くはなく、「奴隷売却地域」の実態は明らかにされていない。これを明らかにすることは、南部全体の正しい理解にとって不可欠である。

なお、今日の奴隷制度研究は地域の枠を超えたグローバルな研究展開の一方で、研究対象の細分化と社会史的アプローチ⁽¹⁰⁾が大勢を占めている。本稿では個別のプランターの史料分析を通してアンティベラム期のプランターの経営状況について考察することを目的としているが、「プランターの経営」を研究対象とする場合、1生産単位として捉えられ得る大プランテーションの個別研究にはマクロ的データやアメリカ南部奴隷制度と他の世界に見られた奴隷制度との相対化では見出せない

-
- (6) Conrad, A. H., Meyer, J. R., "The Economics of Slavery in the Ante-bellum South" *Journal of Political Economy* Vol. LXVI (April, 1958). Fogel, R. W., Engerman, S. L., *Time on the Cross Vol. 1; The Economics of American Negro Slavery* (Boston, 1974).
- (7) Tadman, M., *Speculators and Slaves: Masters, Traders and Slaves in the Old South* (Madison, 1989).
- (8) 植民地期研究として Greene, J. P., Pole, J. R., eds., *Colonial British America: Essays in the New History of the Early Modern Era* (Baltimore, London, 1984), McCusker, J. G., Menard, R. R., *The Economy of British America, 1607-1789* (Chapel Hill, 1985) などを参照されたい。Kulikoff, A., *Tobacco and Slaves: The Development of Southern Cultures in the Chesapeake, 1680-1800* (Chapel Hill, London 1986), 更に東部海岸地域研究の代表的なものとして次を挙げる。Carr, L. G., Walsh, L. S., et al. eds., *Colonial Chesapeake Society* (Chapel Hill, 1988), Menard, R. R., *Economy and Society in Early Colonial Maryland* (New York, 1985), Morgan, P. D., *Slave Counterpoint; Black Culture in the Eighteenth Century Chesapeake and Lowcountry* (Chapel Hill, London, 1998).
- (9) 例として次の二つを挙げる。Paterson, O., *Slavery and Social Death: A Comparative Study* (Cambridge, 1983). Davis, D. B., *Slavery and Human Progress* (New York, 1984).
- (10) 社会史的研究は様々な局面から展開した。総合的な研究として Blassingame, John W., *The Slave Community: Plantation Life in the Ante-bellum South* (New York, Oxford, 1979). プランテーション内の女性史, Fox-Genovese, E., *Within the Plantation Household: Black and White Woman of the South* (Chapel Hill, 1988). 自由奴隷, 逃亡奴隷について Berlin, I., *Slaves Without Masters: The Free Negro in the Antebellum South* (New York, 1974) などを参照。

新たな発見があると考え。また、大勢を占める社会史的な奴隷制度研究は新しい事実の発見に大いに貢献したが、アンティベラム期においては奴隷の生活実態や自由活動などは奴隷身分である以上、プランターの経営の枠内で実現されたものである。奴隷がどのような状態にあったかは経営に大きな影響力を有していたので、プランター側が求める奴隷の管理・統括の方法は常に最重要項目であったはずであり、その実現に最も尽力が注がれたはずである。プランターが望んだ奴隷の扱い、管理方法を理解することが、より「奴隷身分」の実態に近づく方法と言える。これらを明らかにするのが個別事例の検証であり、「奴隷身分」の実態を把握・理解する上で意義があると考え。

第2章 アンティベラム期までのタバコ生産圏

本章では、まずアンティベラム期までの東部海岸地域史を概観し、どのような状況でプランターがアンティベラム期を迎えたかについて説明する。

チェサピーク湾岸地域とタイドウォーター地域は17世紀初頭からステーブルであるタバコ生産に特化し、最初にイギリスを中心とした大西洋経済の中に組み込まれていった地域である。18世紀までにはプランターの土地所有権が両地域でほぼ確立されていた。植民地時代には2度のタバコ生産の成長期が見られ、第1期は1616～1680年代であり、第2期は1715～1775年であった。1680年代以前は価格が低下傾向にあった中で生産量が拡大しており、これはタバコ栽培に関わるコストの切り下げが生産地やヨーロッパ市場でのタバコ価格の低下を招き、その結果市場が拡大して生産量が増大したためと考えられる。⁽¹¹⁾ 1680年代から約30年間続く同地域の不況の主要因は、先の消費市場の拡大と生産コストの削減が一つの限界に達したためであり、そのため生じた土地と労働力の価格上昇から、労働力についてはそれまでの白人年季奉公人からより安価な奴隷の大量輸入に転じるという決定的変化が起きた。⁽¹²⁾ 18世紀におけるタバコ生産の成長は需要主導であり、中でもヨーロッパ再輸出市場の拡大によるところが大きい。⁽¹³⁾

17世紀は同地域の「ヨーマン・プランター」の時代と呼ばれ、社会的流動性が高く、富の分配も比較的平等で、家族と数人の年季奉公人による小規模経営農場が経済を支配していた。同地域の初

(11) 池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開——チェサピーク湾ヴァージニア植民地を中心として——』ミネルヴァ書房、1987年、145頁。

(12) 17世紀末から18世紀初頭にかけてのタバコ生産停滞期の変化について Carr, L. G., “Diversification in the Colonial Chesapeake” 353-355. Carr, et al. eds., *Colonial Chesapeake Society*. 労働力転換は和田光弘「メリーランド植民地社会の展開——労働力転換を軸として——」『西洋史学』143号(1986年) 26-29頁。

(13) Breen, T. H., *Tobacco Culture ; The Mentality of the Great Tidewater Planters on the Eve of the Revolution* (Princeton, 1985) 78. 再輸出市場について Clemens P., *The Atlantic Economy and Colonial Maryland's Eastern Shore—From Tobacco to Grain—* (Ithaca, London, 1985) 112-119.

地図1 チェサピーク湾岸地域, 1750年代



出所) Carr L. G., Morgan P. D., et al. eds., *Colonial Chesapeake Society* (Chapel Hill, London, 1988).

注) 文中に登場する Harford County は図の Baltimore County と Cecil County の中間に位置する。

期農業システムはチェサピーク農法 (Chesapeake System of Husbandry) といわれ、ヨーロッパとネイティブ・アメリカンの農業技術を融合させたものであった。輪作周期は20年で、輸出収入により製造品と奉公人を購入し、自家消費分は自給するシステムであり、労働力の節約・地力の維持に効果的であった。このシステムが、17世紀には自由移民や年季奉公人が独立することを可能にして⁽¹⁴⁾いた。

しかし17世紀末から18世紀初頭にかけての不況、人口構成の変化、土地・奴隷の相続財産の有無などからヨーマン・プランター時代の社会的平等は崩壊し、大プランテーションの建設が進んだ。18世紀以降、大プランター同士の血族の団結は固まり、他の中小農民とは一線を画す共通の「タバコ・メンタリティー」を基盤とした文化性を持つ土地貴族的上流階級、いわゆるチェサピーク・ジェントリ層の出現が見られたのである。⁽¹⁵⁾

次に、タバコ栽培についての問題点に触れておく。タバコは砂糖や米など他のステープルに比べ

(14) Menard, R. R., *Economy and Society in Early Colonial Maryland* (New York, 1985) 75-78. 自由移民、年季奉公人の社会的上昇について Menard, R. R., "From Servants to Freeholder: Status Mobility and Property Accumulation in Seventeenth Century Maryland" *William and Mary Quarterly* Vol. XXX (1973) 参照。

(15) Breen, *op. cit.*, 82-83. Chesapeake gentry の形成過程について Kulikoff, *op. cit.*, 263-280.

て集約的作物であり、より注意深い手作業による栽培過程を経る必要がある。また、植民地時代においては単位生産あたり最も多くの労働力投下を必要とした作物の一つでもある。独立後、最も深刻な影響を与えたのが長年のタバコ栽培による地力の枯渇である。タバコは数あるステープルの中でも最も土地収奪的であり、この時期には同じ土地で4年続けてタバコ生産に従事するのは不可能と言われた。⁽¹⁶⁾これはプランターの無知も原因の一つであるが、独立後この地域で第2ステープルとなった小麦がタバコ同様に土地収奪的であったことが土地の疲弊に拍車を掛けたといつてよい。しかし、これは改良の余地がなかったわけではない。19世紀になってこの地域に留まったプランターの多くは地力を回復するための様々な改良の取り組みを行っており、科学的農法の採用や品種改良などに熱心で、成功例も数多くあったことが当時の事例や農業雑誌から判断できる。⁽¹⁷⁾

タバコ価格は安定的ではなく、ヨーロッパ市場の動向に大きく影響された。しかも同地域のプランターは、不況期には生産多様化の試みや検査制度・公共倉庫の設置など精力的に打開策を練ったが即効性はなく、景気回復時には生産拡大によって応じたため、度重なる景気後退時の打撃は相当のものであった。⁽¹⁸⁾このようなタバコ生産に関わる不安定要素からタバコ生産を断念したり、新たなステープル生産に転換するものが18世紀中から現れ始め、18世紀中頃には小麦を中心とする穀物生産が西インド諸島や大陸他地域との取引による価格上昇に支えられ繁栄したことから、小麦が第2ステープルとして定着した(表1)。1738年から1742年にかけて、タバコと小麦の年間生産額価値の比率は14対1であったのに対し、約30年後には3対1にまで小麦生産は飛躍していた。⁽¹⁹⁾独立戦争前にはチェサピーク湾岸タバコ生産地帯を穀物生産地帯が取り囲むような構造を取り、19世紀には穀物生産地帯が東西に拡張し、さらにタバコ生産地域の中心部にまで広がっていったのであった。⁽²⁰⁾

(16) タバコ栽培の問題点と第2ステープルである穀物生産の採用について Gray, *op. cit.*, 606-617, Morgan, *Slave Counterpoint*, 164-179. 18世紀初頭のタバコ諸規制について, Kulikoff, *op. cit.*, 104-117.

(17) 農業改良の成功例として代表的なケーススタディは Herndon, C. M., "Agricultural Reform in Antebellum Virginia: William Galt Jr., A Case Study" *Agricultural History* Vol. 52 No. 3 (July, 1978) 394-406. また当時南部プランターの多くが *Southern Cultivator*, *Southern Planter*, *American Farmer* などの農業雑誌を講読しており、雑誌記事の多くは農場改良に紙面を割いていた。Gray, *op. cit.*, Agricultural Societies, Fairsの開催について782-788, Journals788-789, Education, Research789-792, 土地改良800-806. 併せて Gates, P., *The Farmer's Age: Agriculture 1815-1860* (New York, London, 1960)338-382., Craven, A. O., *Soil Exhaustion as a Factor in the Agricultural History of Virginia and Maryland* (1926, Gloucester) 参照。

(18) タバコプランターの不況期に対応について Gray, *op. cit.*, 262-272. Gates, 104-107.

(19) Morgan, *Slave Counterpoint*, 170. 同地域の小麦生産とタバコ生産の関係については次も合わせて参照のこと。

Klingaman, David "The Significance of Grain in the Development of the Tobacco Colonies" *Journal of Economic History*, Vol. XXIX (1969).

(20) 池本, 前掲書, 158頁。

麦生産は、タバコよりも奴隷労働力を必要としないのが特徴であった。⁽²¹⁾そのため19世紀初頭までに、タバコ生産の衰退は穀物生産地域の拡大をもたらすとともに、18世紀初頭から自然増加し始めた奴隷の余剰を生み出していったのである。

〈表一〉 チェサピーク湾岸諸カウンティの輸出作物生産農場の割合

(%)

	Somerset		Anne Arundel		Talbot		St. Mary's	
	タバコ	小麦	タバコ	小麦	タバコ	小麦	タバコ	小麦
1700-1709	25.0	8.9	52.8	14.7	*	*	27.6	1.5
1710-1722	38.3	8.5	53.8	20.9	72.4	32.9	39.0	7.2
1723-1732	40.9	12.2	64.3	26.1	70.1	44.8	53.9	12.0
1733-1744	52.0	21.3	66.0	34.9	80.1	53.0	62.0	7.2
1745-1754	46.2	36.9	55.7	35.5	82.0	58.1	47.5	14.0
1755-1767	40.6	33.0	46.2	34.7	54.5	67.7	43.1	16.0
1768-1777	41.1	42.5	44.8	37.6	58.0	59.1	39.5	22.0

出所) Carr, L. G., "Diversification in the Colonial Chesapeake; Somerset County, Maryland, in Comparative Perspective" in Carr, et al. eds., *Colonial Chesapeake Society* (Chapel Hill, 1988) 360-361.

注) 全農場中、輸出作物としてタバコあるいは小麦を出荷している農場の割合であり、タバコと小麦の両方を出荷している農場は両項目で勘定されている。*は残存記録なし。

アンティベラム期の東部海岸地域は、植民地時代から中心的作物であったタバコ生産地域の縮小と小麦生産地域の拡大が見られたこと、それに応じて拡大する西部綿花地帯に移住する農民もいれば、東部に留まって農業改良に取り組む農民もおり、単純なモノカルチャー経済圏からは脱却していた。農業経営における最重要項目である奴隷の扱いにも、変化が生じていた。これらの変化の過程は、個別のプランターの史料を通してより詳しく知ることが出来る。次章からは個別事例の分析に入る。

第3章 奴隷の管理形態と奴隷の職種の分化

植民地時代初期における東部海岸地域の農場労働力は、本国から送られる白人年季奉公人であった。彼らは、タバコプランテーションで農場労働に一定期間従事した後、自ら農場と労働力を有する小プランターとして独立し、社会的に上昇する可能性があった。しかし、17世紀末にかけて公職及び土地獲得の機会が一部の富裕なプランター層に集中する傾向が現れるなど、年季奉公人をめぐ

(21) Morgan, *Slave Counterpoint*, 178. 1年の平均労働日数はタバコが113日、米作が188日であるのに対し、小麦は25日であると言われる。しかし、小麦生産に関わる奴隷1人に指定される農場範囲は広い(1人約10エーカー)。

る社会的状況が過酷なものとなり、17世紀末から18世紀初頭におけるタバコ市場の不況期に年季奉公人よりも価格の安価な黒人奴隷へと労働力の転換が行われた後は、年季奉公人の移住数も減少していった。⁽²²⁾ ガレンソンの研究によれば、年季奉公人の減少は年季満了後の機会の減少とともに、集団労働の嫌悪、カロライナやペンシルヴェニア植民地の魅力、白人の質の低下（囚人・犯罪者移住数の増加）などの要因が重なり、まず初めに不熟練労働者から奴隷労働に転換し、熟練労働は白人労働に頼り続けたことが明らかとなっている。すなわち、年季奉公人だけの労働システムから、年季奉公人と黒人奴隷の共存・分業体制を経て、完全な黒人奴隷制へと移行していったと考えられるのである。⁽²³⁾ 更に、1680年代に始まった不況が、それまで輸入に頼っていた製品の自給への転換を余儀なくさせたことも重要であり、プランテーション内で衣服や道具等を自給するには熟練労働者が必要であった。⁽²⁴⁾ 18世紀になると、本国から東部海岸地域に移住してきた契約書を持つ年季奉公人のほとんどが、何らかの熟練技術を身に付けた職人であったと言われていた。⁽²⁵⁾ 1720年代以降、不況が回復する頃には奴隷人口の自然増加と技術取得が見られ、奴隷への投資に対する収益率は上昇し始め、有利な投資となっていった。⁽²⁶⁾

チェサピーク湾岸地域を中心に、強制移住されてきた奴隷は、一様にステープルであるタバコの生産に従事した。1750年代までには年季奉公人から黒人奴隷への労働力転換がほぼ達成し、その労働条件は年季奉公人とは異なる体制を作り上げていった。この頃までには、穀物生産を取り入れ、農場作物の多様化を計るプランテーションも増加し、1年中労働の対象となる作業があり、年間の農業計画の変化が見られた。⁽²⁷⁾

奴隷労働の効率を最も左右したのは、奴隷労働集団の規模であった。タバコのように注意深い手作業が必要とされる作物には、「組」労働 (Gang Labor) が採用され、監督者による厳しい監視の下で単調で過酷な労働が行われた。⁽²⁸⁾ 一方、低地地帯 (Low Country) の米作地帯などでは1日、あるいは1週間などの期限内で、個々の奴隷それぞれに達成すべき目標を与え、その完成を要求する

(22) タバコ生産停滞期の変化について Carr, L. G., "Diversification in the Colonial Society" *op. cit.*, 353-355. なお、年季奉公人の社会的上昇の可能性（土地獲得）は1652年以前で約60%、1658-1674年49%、1675-1679年30%、1680-1689年18%、1690-1705年0%と推定される。和田，前掲書，26頁。

(23) Galenson, D. W., "White Servitude in the Growth of Black Slavery in Colonial America" *Journal of Economic History* Vol. XLI, No. 1, (March, 1981) 39-47.

(24) Carr, *op. cit.*, 353-357.

(25) Galenson, D. W., *White Servitude in Colonial America: An Economic Analysis* (Cambridge, 1981) 139-140.

(26) Kulikoff, *op. cit.*, 383-385.

(27) 各作物の年間スケジュールについて Carr, L. G., Walsh, L. S., "Economic Diversification and Labor Organization in the Chesapeake, 1650-1820" Innes, S., ed., *Work and Labor in Early America* (Chapel Hill, 1988), 157-160.

(28) Gray, *op. cit.*, 550-551., Morgan, *Slave Counterpoint.*, 187-194.

労働の形態である「課業」労働 (Task Labor) が採用された。⁽²⁹⁾

「組」労働は、集団内のすべての奴隷がそれぞれの力量、能力にかかわらず、一体となって同一の農作業を日の出から日没まで行う労働形態であり、カーとウォルシュは「組」は少なくとも4人以上の奴隷を有する同地域のプランテーションで成立し得たとしている。⁽³⁰⁾ タバコ同様に、砂糖プランテーションも生産過程多くの工程を同時に並行して行う注意深い作業の連続であり、労働を監督することが重要な作業であったため、「組」労働が採用された。「組」集団においては、1人の奴隷(組頭, driver)⁽³¹⁾が労働のペースを定めたが、「課業」労働に比較すると労働のスピードは遅く、奴隷の怠惰な性格が目立った。それは、「課業」労働では、与えられた目標を完成させると、残りの時間を奴隷が自由に使える特典があったため労働のスピードも早まるが、タバコ生産圏では「組」労働の下、日曜日以外は1日中重労働を行い、「課業」労働地域見られたような独立生産活動⁽³²⁾や自由時間をほとんど持てなかったためである。そもそもタバコ栽培は、播種や除草以外は単純な農作業の連続ではなく、時間を掛けて品質を識別する慎重さが必要であり、課業で目標達成を要求する類の労働とは異なっていた。⁽³³⁾しかし、「組」労働採用地域においても、19世紀までには「課業」労働の導入が段階的に始められた。プランターの経営方針によって、「課業」労働と「組」労働を組み合わせて管理するプランテーションもあれば、完全にいずれかの形態に一本化する例も見られた。⁽³⁴⁾「課業」労働への移行は、「課業」労働の効率性の高さ⁽³⁵⁾と監督コストの削減を実現する意図もあったが、生産物の多様化によって「課業」労働の方が実情に即した作物の栽培に携わり始めたこと、低地地帯から一步遅れて熟練労働が増え専門的な職種に就く奴隷が増加したことと「課業」労働の広まりが時期的に一致すること、が重要である。〈表-2〉は、18世紀末の米作・綿花地帯における奴隷の課業内容を示している。

(29) Morgan, *Slave Counterpoint*, 179-187.

(30) Carr, Walsh, "Economic Diversification" 162-165.

(31) driverはforemanともいい、奴隷集団のリーダー格。しばしば白人監督者と衝突し、白人監督者の持たない特権も有していた。driverについて、Genovese, E. *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made* (New York, 1974) 379-384., Blassingame, J. W., *The Slave Community: Plantation Life in the Antebellum South* (New York, Oxford, 1979) 258-260を参照されたい。

(32) 独立生産活動とは課業労働に従事する奴隷が課業の完成の後に自身と家族用作物生産にあてられる自由な農業労働のことであり、プランターから一定の面積の農場を与えられている場合が多かった。独立生産活動について、Genovese, *op. cit.*, 535-539. Reidy, J. P., "Obligation and Right: Patterns of Labor, Subsistence, and Exchange in the Cotton Belt of Georgia" in Berlin, I., et al. eds., *Cultivation and Culture: Labor and the Shaping of Slave Life in the Americas* (Charlottesville, 1988) 138-153など多くの研究がある。

(33) Fogel, R. W. *Without Consent or Contract: The Rise and Fall of American Slavery* (New York, 1989) 36, 427.

(34) Morgan, *Slave Counterpoint*, 179.

〈表一〉 奴隷1日の課業内容

課業内容	1人1日分の課業単位
米作地の掘り起こし	4分の1エーカー
米作地地条作り, 播種後の土かけ	2分の1エーカー
米作地第1, 2の鋤入れ, 除草	4分の1エーカー
米作地第3の鋤入れ	2分の1エーカー
脱穀	7臼
柵用の木材割り	100本
とうもろこしの鋤入れ, 積み上げ	2分の1～1エーカー
綿花の摘み取り	2分の1エーカー
綿花の鋤入れ, 運搬	2分の1～1エーカー
じゃがいもの鋤入れ	2分の1～1エーカー
排水溝作り	600フィート四方
播種, 畦作り	4分の1～2分の1エーカー
鋤による苗床	4分の1～2分の1エーカー
米用の溝作り	各方向に150フィート 2分の1エーカー

出所) *Southern Cultivator* (August, 1860) 及び Morgan, P. D., "Work and Culture: The Task System and the World of Lowcountry Blacks, 1770-1880". *William and Mary Quarterly* Vol. XXXIX, No. 4 (Oct. 1982) より作成。

米作地帯を中心とした「課業」労働地帯で奴隷1人に与えられた課業単位は基本的に1日4分の1エーカーであった。⁽³⁶⁾ 例えば、米作地の掘り起こし作業であれば1日4分の1エーカーであり、米作地の地条作りおよび播種後の土かけは1日2分の1エーカーであった。

「課業」単位は、4分の1エーカー、多くて2分の1エーカーであったことが判明し、米作プランテーションにおいては奴隷1人当たりにつき土地が平均3～5エーカーであったのに対し、タバコ生産地域では1人当たり約1.5～2エーカーであったことから、タバコ栽培には慎重さがより必要とされたことが明らかとなる。⁽³⁷⁾

タバコ生産地域においても徐々に「組」労働から「課業」労働への移行が見られたことは先に述べたが、これは穀物生産を中心とする生産多様化の流れ、及び、同地域の大プランテーションにお

(35) *Ibid.*, 174-175. なお、タバコ生産地域での課業の広まりは農場における職種の分化と並行して、最初は性別による分化から始まったとされる。また、農場職種と熟練職種が並行して分化していったが、当初は多くの職種の兼任が見られた。(特に収穫期はほとんどの奴隷は農場労働に従事)。更に、職種が増えるに連れ、賃貸奴隷(農場奴隷, 熟練奴隷の両方)も増加していく。Kulikoff, *op. cit.*, 385-387. Genovese, *op. cit.*, 388-392 も参照。

(36) Morgan, *Slave Counterpoint* 179.

(37) *Ibid.* 42, 177. Morgan, P., "Task and Gang Systems: The Organization of Labor on New World Plantations", Innes, *Work and Labor*, 203-206.

ける熟練奴隷の増加と密接に関連があると言える。穀物生産による多様化は、「組」単位数の増加をもたらし、単位ごとの労働は指定された労働に特化していったため、奴隷が特定の労働を身につけるに伴い、監督者の必要性も薄れていった。⁽³⁸⁾ チェサピーク湾岸地域における熟練労働には、タバコ・穀物栽培が米作ほど多くの技術革新をもたらさなかったため、低地地帯などの他地域と比較すると18世紀後半まで増加傾向は見られなかったが、農場労働内の職種分化は、生産の多様化により顕著に見られた（表-3）⁽³⁹⁾。また、初期の熟練奴隷の増加については大規模プランテーションほど顕著に現れ、熟練奴隷の多くはいくつかの職種を兼任していた。⁽⁴⁰⁾ これらの変化は並行して徐々に進行し、19世紀初頭までにはほぼ完全に移行していったと考えられる。1830年までには南部の多くの奴隷が「課業」労働に従事しており、19世紀前後までに熟練奴隷・不熟練奴隷の区別が明確となり、生産多様化農場が大勢を占めていたのである。

〈表-3〉 チェサピーク湾岸地域における職種の分化

職種	1733年	1757-1775年	1784-1809年
農場	95%	70%	65%
農場労働者	90%	70%	60%
foreman	2%	*	1%
熟練奴隷	4%	24%	25%
家内奴隷	1%	4%	10%
計	100%	98%	100%

出所) Morgan, *Slave Counterpoint* (1998) 211.

注) 1733年は Kulikoff, *Tobacco and Slaves* (1986) 385 より。N: 1733=1323, 1757-1775=409, 1784-1809=382。*は1%以下。熟練奴隷は家内奴隷以外で、農場労働でない職種が会計記録上の Occupation の欄に記載されている奴隷。

次に、19世紀に見られたこの傾向を確認する。ヴァージニア州のタイドウォーター地域にあった Mount Airy プランテーション (Warsaw, Virginia) の所有する奴隷について分析すると、1823年の財産目録からは〈表-4〉の結果が得られる。この時期の特徴は、1人の奴隷が多くの職種を兼任していることである。

Mount Airy はタバコと小麦両ステープルを生産する同地域の典型的な大プランテーションであり、表にあげた Mount Airy, Fork, Drs. Hall 以外にも、農場を4つ以上所有していた。⁽⁴¹⁾ 同地域

(38) *Ibid.* 187-221.

(39) Kulikoff. *op. cit.*, 399. Morgan, E. S., *Virginians at Home; Family Life in the Eighteenth Century* (Charlottesville, 1963) 53.

(40) Morgan, *Slave Counterpoint.*, 218.

〈表一4〉 Mount Airy プランテーションにおける奴隷の職種と奴隷数 [1820年代]

	Mount Airy	Fork	Drs. Hall
Cutter	8 ^a	7 ^d	6
Jobber	5	1	0
Gardener	2	2	0
Mason	2	0	0
Cradler	9 ^b	6 ^e	6 ^f
Raker	13 ^c	6	8 ^g
Carpenter	0	1	10
Spinner	8	0	7
Shoemaker	0	2	0
House Servant	2	2	0
Blacksmith	0	1	0
Ironer	0	1	0
Miller	2	0	0

出所) Mount Airy プランテーション文書 (1823年), SHC.

- a 5人のJobber, 2人のGardener, 2人のMasonが兼任。
- b 5人のJobber, 2人のGardener, 2人のMasonが兼任。
- c 7人のSpinner, 2人のMiller, 2人のJobberが兼任。
- d 1人のJobber, 2人のGardenerが兼任。
- e Ironer, House, Servant, Shoemaker, Blacksmith, Carpenterそれぞれ1人が兼任。
- f 6人のCarpenterが兼任。
- g 4人のCarpenter, 4人のSpinnerが兼任。

の大プランテーションにおいては、熟練奴隷の増加が18世紀末から見られていたが、1820年代においてはまだ職種の兼任が見られていた。一方、1840年代、1850年代の同プランテーションの財産目録を見ると、職種の増加と職種の兼任の低下が見られる(〈表一5〉)。

さらに両時代を比較すると、1820年代には職種の中に農場労働者の仕事である cutter, cradler, raker (いずれも特別の農具を用いて収穫期に農場労働に従事する、ある種の技術が必要な農場労働)などが含まれているのに対して、1840年代以降においては職種は完全に農場労働以外の特殊技術に限定されており、農場労働者は全て field hand という記述で統一されている。同時に、農業労働以外の職種を有する熟練奴隷が全奴隷のなかに占める割合も増加していたことが確認できており、この傾向は、同じくヴァージニア州の大プランター Cocke 家の記録からも分かる⁽⁴²⁾(〈表一6〉, 〈表一7〉)。Cocke 家も、Mount Airy 同様、いくつかの農場を併せ持つ大プランテーションであり、輪作周期や放牧、農場建設などの関係で各農場での作業の割り当ては異なるため、各農場で同様の傾

(41) Mount Airy, Fork, Drs. Hall に加えて、Oakenbrew, Hopyard, Gwinfield, Landsdown などの農場が確認される。Mount Airy プランテーション文書, SHC.

(42) Cocke 家文書, SHC.

〈表—5〉 Mount Airy プランテーションにおける職種別熟練奴隷 [1840年代-50年代]

		1842年	1843年	1854年
男 性 奴 隷	Cook	1	1	1
	Couchman	1	1	1
	Dining Room Servant	1	2	2
	Stable Boy	1	1	*
	Scullion	1	1	1
	Gardener	2	2	2
	Jobber	5	5	3
	Mason	2	*	*
	Sawyer	2	*	*
	Miller	3	3	3
	Blacksmith	3	3	3
	Joiner	3	3	3
	Shoemaker	2	2	1
	Carpenter	6	7	5
Sailor	3	3	3	
女 性 奴 隷	Laundry Maid	1	2	*
	Nurse	1	1	1
	House Maid	2	2	2
	Dairy Maid	1	3	1
	Seamstress	1	1	3
	Weaver	1	1	2
	Spinner	4	6	2

出所) Mount Airy プランテーション文書 (1842, 1843, 1854年), SHC.

注) *は記載なし。

〈表—6〉 Cocke 家の奴隷

農 場	全奴隷数	熟練奴隷数	全奴隷数	熟練奴隷数
	1835年		1845年	
Mcherrin Plantation	97	22 (22.7%)	62	19 (30.6%)
Rose Creek "	55	4 (7.3%)	26	6 (23.1%)
	1839年		1845年	
Belle Mead Plantation (Powhatan County)	50	14 (28.0%)	94	35 (37.2%)
	1835年		1839年	
Loundes County (Mississippi)	59	3 (5.1%)	53	16 (30.2%)

出所) Cocke 家文書 (1835, 1839, 1845年), SHC.

注) 史料の欠落のため、農場で比較可能な年代に差が生じた。なお、Mcherrin, Rose Creek 両農場において全奴隷数に減少が見られるのは1830年代後半に建設された Mississippi の農場に奴隷を送り込んだためである。

〈表一七〉 Cocke 家の熟練奴隷（職種）

熟練奴隷職種	Mcherrin Plantation		Belle Mead Plantation	
	1835年	1845年	1839年	1845年
Foreman	1	—	1	—
Carter	—	—	1	—
Hog minder	—	—	1	—
Gardener	—	—	1	1
Spinner	5	10	—	—
Seamstress	1	—	—	3
Weaver	3	—	—	1
Cook for hands	1	—	1	1
Cook for house	—	1	—	1
Cook for overseer	—	1	1	1
Nurse	—	—	1	3
House Servant	3	2	—	—
Servant Maid	—	—	—	4
Waiter in house	—	—	—	3
Dairy Maid	—	—	—	1
Scullion	—	—	—	1
Carriage Driver	—	—	—	1
Hog Feeder	1	—	—	—
Cow Driver	1	—	—	2
Stone Mason	2	1	1	5
Miller	—	1	—	1
Carpenter	3	—	2	3
Shoemaker	1	1	—	—
Sawyer	2	1	2	—
Wheelright	1	1	—	—
Blacksmith	2	1	2	2
Groom	—	—	—	1

出所) Cocke 家文書 (1835, 1839, 1845年), SHC.

注) Mcherrin プランテーションでは熟練奴隷の一部が新たに建設されたプランテーションに送られたため奴隷総数, 熟練奴隷総数, 職種も減少している。Belle Mead プランテーションでは奴隷総数, 熟練奴隷総数, 職種ともに顕著な増加が見られる。

向を確認することは出来ないが, 全体として職種の増加と全奴隷の中にしめる熟練奴隷の割合の増加を見出す事が出来る。

チェサピーク・タイドウォーター両地域において最初に現れた農業以外の職種は, 材木に関わる職種であり, タバコを詰める樽作りの技術所有者と, その材料である原木の伐採にあたる sawyer がそれとされている⁽⁴³⁾。しかし, 職種が増加するにつれ, 材木業に関わる熟練奴隷は全熟練奴隷の中でも地位が低いとされ, 農場労働者とほとんど待遇は変わらず, 農場労働者との兼任が多かった⁽⁴⁴⁾。

材木業とともに農場労働者と肩を並べるとされた職種は jobber と sailor であった。jobber は農場労働者に最も近い所で、各種熟練労働の手助けをする奴隷で、特定の職種に秀でていたわけではない。また、sailor は主に河川の航行に用いるボートに関わる仕事をしていて、この職種も基本的には肉体労働で農場労働者と大きな差はなかった。最も地位が高く、また価値も高いと言われたのは、一般に徒弟期間を必要とする職種であった。チェサピーク・タイドウォーター両地域は他地域と比較して、比較的遅くまで白人の熟練技術者が残った地域であり、熟練労働が奴隷によって占められることは19世紀になっても見られなかった。プランテーションの拡大とともにプランテーション内で抱える奴隷数が増えると、プランターは長く熟練技術で身を立っていた地元の白人労働者に奴隷を徒弟として送り込むようになり、carpenter, blacksmith, mason などの技術を身につけさせた。⁽⁴⁵⁾ 奴隷は15歳前後で徒弟に送り込まれ、数年の修行の後、元のプランテーションに戻ると、プランテーション内で最も価値の高い奴隷になっていることが多かった。また、奴隷集団のリーダーである foreman (組頭, driver) の奴隷内の地位も当然、高いものであった。彼らは、他の奴隷を統括し、労働ペースを決定する任務を負っていたので、他の奴隷の尊敬・信頼を集める存在でなくてはならなかった。監督者 (overseer) のいないプランテーションであれば組頭が実質上の監督者になり、プランテーション労働に関する全権を与えられることがしばしば見られた。⁽⁴⁶⁾ このような特徴から、チェサピーク・タイドウォーター両地域では組頭を採用していたプランテーションは約3分の1で、決して多くはなかったが、概して彼らの地位・価値は高かった。⁽⁴⁷⁾

家内奴隷は、特殊な熟練奴隷である。家内奴隷は早くから見られ、18世紀初頭から使用されており、植民地時代およびアンティベラム期を通じて労働条件の変化が少なかった職種であるといえるだろう。彼らはプランターに最も近くにいる奴隷であり、農場労働者と一線を画す特権的な奴隷で、屋外での熟練技術職種に関わるのは男性奴隷が多かったのに対して、家内奴隷の職種は女性に適しているものが多かったと言える。特に、チェサピーク湾岸地域では自給率の高い大プランテーションが多かったため、18世紀末以降、織布生産に関わる女性家内奴隷が増えていき、上記の Mount Airy や Cocke プランテーションでもその傾向は伺える。⁽⁴⁸⁾

奴隷は、賃貸市場において取り引きされることがよく見られた。近隣の中小プランテーションで不足する奴隷労働を大プランテーションから期限付きで借りることは、頻繁に見られた。熟練奴隷だけでなく、農場奴隷もまた18世紀においては賃貸市場で需要が高かった。⁽⁴⁹⁾ また、18世紀中頃から

(43) Work Project Administrator, *The Negro in Virginia* (New York, 1969) 36-37.

(44) Morgan, *Slave Counterpoint*, 227.

(45) 奴隷の徒弟制について、Kulikoff, *op. cit.*, 403. Morgan, *op. cit.*, 214-216.

(46) Blassingame, *op. cit.*, 260.

(47) Morgan, *Slave Counterpoint*, 218-225.

(48) 具体的には Spinner, Weaver, Seamstress など。Weaver は一般に男性にも見られた。

同地域では Richmond, Baltimore, Norfolk, Annapolis, Fredericksburg といった大都市が急速な成長を見せるが、中でも Richmond はこの地域の最大の奴隷市場が形成された都市であった。19世紀までには Richmond 奴隷市場は成熟し、多くの奴隷商人、奴隷売却組織が拠点を築いていた。次章では、西部の奴隷需要に応じて奴隷売却が行われるに伴い、Richmond で取り引きされた奴隷の価値が個々のプランテーションの会計記録上にどのように表れていたかについて、考察する。

第4章 会計記録上の奴隷資産の扱い

19世紀に入ると、南西部綿花地帯は急速に発展を遂げ、1808年の奴隷貿易禁止以降においては必要とされる奴隷労働力の供給先を東部海岸地域に求めた。チェサピーク・タイドウォーター両地域においてはこれまで述べてきたように、18世紀後半以降、「課業」労働の広まり、生産物の多様化、熟練奴隷の増加傾向が並行して見られた。特に、生産物の多様化で穀物生産を主産物として取り入れたプランテーションにおいては、穀物生産がタバコ生産の場合と比較して1年の必要労働日数が極端に少なかったため、奴隷労働が余剰であるばかりでなく、奴隷1人当たりの維持費がプランター⁽⁵⁰⁾にとっては負担になっていたことが想像できる。そのため、大プランテーションでは熟練奴隷を近隣中小プランテーションに貸し出すことを始め、その延長として、奴隷の売却に踏み切ったと考えられる。その背景には、南部主要都市を中心に拠点を築き始めていた奴隷取引商人（トレーダー）⁽⁵¹⁾の活動の活発化があった。

チェサピーク・タイドウォーター両地域は、アンティベラム期中、一貫して奴隷の売却側に立っていた地域である。奴隷売却地域は西方へ拡大していくが、同地域は奴隷人口が、基本的に一方的に流出していった。同地域における最大の奴隷市場は Richmond に形成され、ここに拠点を置く奴隷取引組織と商人が各地をまわり、競売に出される奴隷、遺産売却の奴隷だけでなく、個々のプランターと直接交渉して奴隷売却の仲介に携わっていった。⁽⁵²⁾

大プランテーションにおいては、奴隷は既に他の家畜や農場設備と同様に資産であった。一例としてメリーランド州、ハーフォード郡の Posey 家の記録に見る同家の資産項目を、〈表-8〉に列挙した。資産価値の勘定はプランター自身によるものであるが、奴隷の資産価値に占める奴隷の重要性については一定の傾向が見られた。

(49) Kulikoff, *op. cit.*, 306-308. Hughes, S. S., "Slave for Hire: The Allocation of Black Labor in Elizabeth City County, Virginia, 1782-1810" *William and Mary Quarterly* XXV (1978) 260-286. 参照。

(50) Morgan, *Slave Counterpoint* 178. Gray, *op. cit.*, 469-475.

(51) Tadman, M., *Speculator and Slaves*, 57-63. Richmond 市場について詳細に触れている。

(52) *Ibid.*, 49-55.

〈表一 8〉 Posey 家の資産項目と資産価値

(\$)

1857年		1860年	
奴隷 (19人)	10600	奴隷 (17人)	13200
家畜	915	家畜	1185
馬 4 頭, ラバ 2 頭, 雄牛 3 頭, 牛 12 頭, 子牛 9 頭, 老牛 3 頭, 子豚 9 匹, 豚 17 匹, 羊 16 頭		馬 4 頭, ラバ 5 頭, 雄牛 6 頭, 牛 30 頭, 子牛 3 頭, 子豚 15 匹, 豚 16 匹, 羊 9 頭	
その他	9660	農場	12000
農具, 幌馬車, 二輪馬車, 家具, 宝飾品, 豚肉 1800 ポンド, とうもろこし 150 ブッシェル, タバコ 6000 ポンド, 小麦 115 ブッシェル, グアノ (肥料) 3 トン, 家禽, まぐさ, 現金, 農場		Home Farm (8000) Mill Farm (4000)	
		その他	3083
		農具, 幌馬車, 二輪馬車, 飼料, 家具, 宝飾品, 豚肉 3700 ポンド, とうもろこし 44 ブッシェル, タバコ 10000 ポンド, 現金 グアノ 4 トン, 小麦 (種子) 100 ブッシェル, 家禽	
計	21175	計	29468

出所) Posey 家文書 (1857, 1860), MHS.

資産項目や財産目録に列挙される所有奴隷の価値は、19世紀になると売却や賃貸を想定した現金価格で記されている場合が多い。先に登場した Cocke 家においては〈表一 9〉の資産総額を1835年に所有しており、奴隷についてはその名前、職種、現金価値、年齢が記されている。〈図一 1〉、〈図一 2〉は、1830年代の Cocke 家の奴隷について、性別にその価格分布を示したものである。男性奴隷の最高価格が \$ 800 であるのに対して女性は \$ 400 であり、男性は推定価格が \$ 400 から \$ 600、女性は \$ 200 から \$ 250 の間に集中していることが分かる。また、男性は20歳代から30歳代前半にかけて価値のピークを迎えるが、女性は10歳代後半から20歳前後がピークであると読み取れる。これは、これまでの伝統的解釈で理解されていた傾向と、ほぼ一致すると言ってよい。⁽⁵³⁾

次に、Cocke 家の熟練奴隷の価格について、傾向を分析する。一般的に熟練奴隷は奴隷市場においても高額で取引され、近隣プランテーションに貸し出すときも高収益をもたらした。⁽⁵⁴⁾ 〈図一 3〉は、Cocke 家の熟練奴隷の推定価格分布である。熟練奴隷は、一般に年齢・寿命が長く、一定期間

(53) Conrad, Meyer 論文 (1954) を始めとする計量的研究では女性は受胎可能期間が最も価値が高く、男性よりも推定価格を高く見積もっていた。トレーダーの査定もその傾向は一部見られるが、女性が高く取り引きされたのは家内奴隷としての使用など、他の要因もあった。Tadman, *op. cit.*, 141-146.

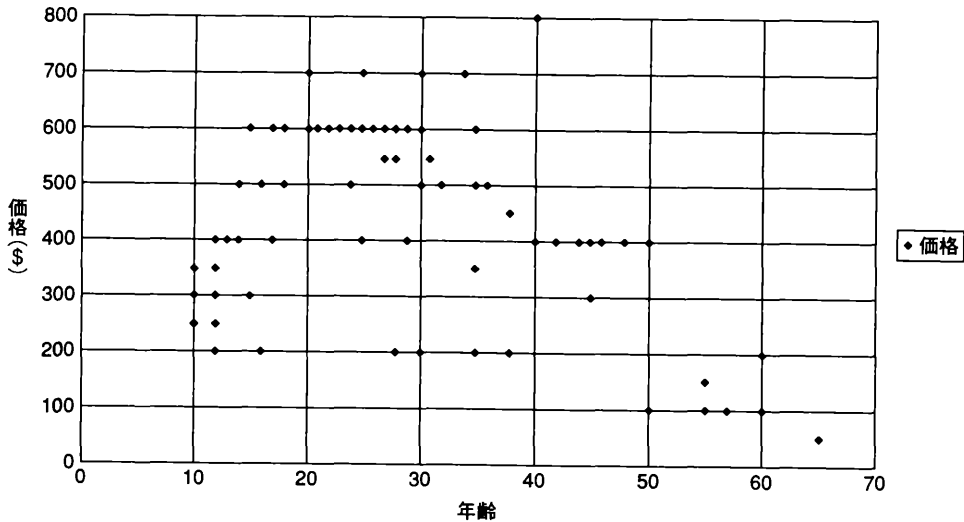
(54) Genovese, *op. cit.*, 389-392.

〈表一 9〉 Cocke 家の資産総額 [1835年]

農場・不動産	エーカー数	奴隷数	資産総額 (\$)
Mcherrin Plantation	1574	97	37744
Rose Creek "	1375	55	20875
Arthur Creek "	1390	68	25086
Pea Hill "	1200	68	24336
Four Mile Free "	960	52	25410
Brunswick (1837年売却)	250	—	750
Southampton	300	—	600
Real Estate (6 lots in Weldon, N.C.)	—	—	2011
Real Estate (1 Wharf in Norfolk, Va.)	—	—	8000
計	7049	340	144812

出所) Cocke 家文書 (1835年), SHC.

〈図一 1〉 Cocke 家所有奴隷推定価格 (生産年齢, 男性) [1835年]

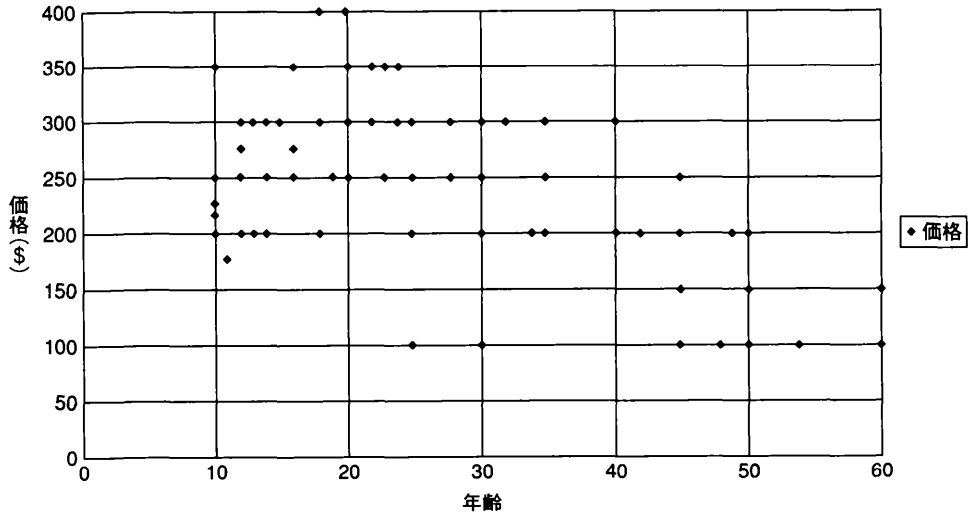


出所) Cocke 家文書 (1835年), SHC.

注) 生産年齢は, 10歳以上, 65歳以下とする。

生産年齢男性は, Mcherrin プランテーション (Brunswick) 31人, Rose Creek プランテーション (Brunswick) 14人, Arthur Creek プランテーション (Brunswick) 17人, Pea Hill プランテーション (Brunswick) 21人, Four Mile Free プランテーション (Surry) 22人, Belle Mead 私有地 (Powhatan) 22人の計127人。

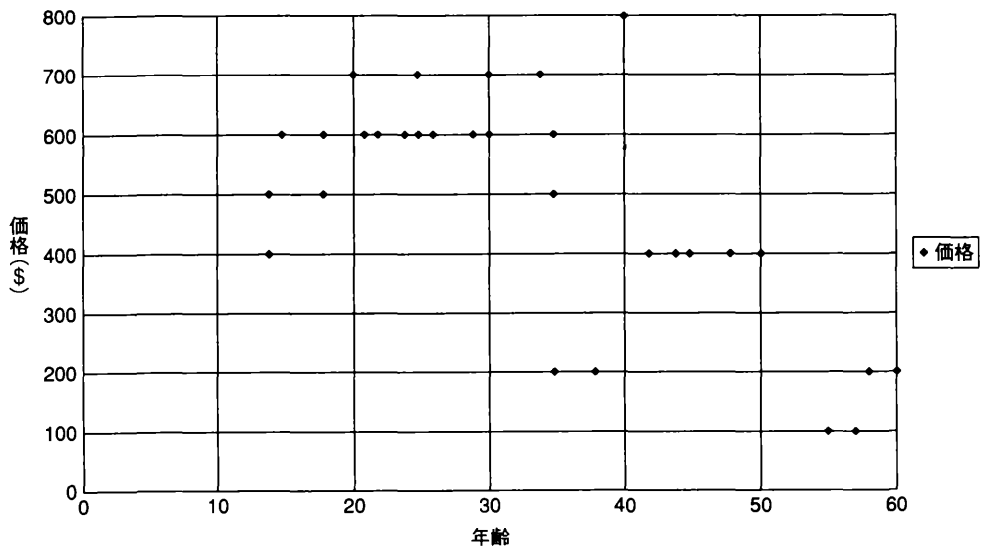
〈図一 2〉 Cocke 家所有奴隷推定価格（生産年齢，女性）[1835年]



出所) Cocke 家文書 (1835年), SHC.

注) 生産年齢女性は, Mcherrin プランテーション22人, Rose Creek プランテーション13人, Arthur Creek プランテーション18人, Pea Hill プランテーション19人, Four Mile Free プランテーション13人, Belle Mead 私有地15人の計100人。

〈図一 3〉 Cocke 家所有熟練奴隷推定価格（男性）[1835年]



出所) Cocke 家文書 (1835年), SHC.

注) 男性熟練奴隷は, Mcherrin プランテーション15人, Rose Creek プランテーション 4人, Arthur Creek プランテーション 4人, Pea Hill プランテーション 3人, Four Mile Free プランテーション 8人, Belle Mead 私有地12人の計46人。

の訓練が必要であるため、農場労働者よりも職種を身につけるのが遅かった。⁽⁵⁵⁾ Cocke 家の熟練奴隷もまた、10歳代後半から職種を確立し、ピークを迎えるのも、全奴隷及び農場労働者の平均年齢よりは遅いことが分かる。また、最も高い価格がついた奴隷（\$ 800, 40歳）は鍛冶業（blacksmith）であり、\$ 700の値がついた職種は、いずれも大工（carpenter）であった。なお、女性の最高価格 \$ 400をつけた 2例は、いずれも家内奴隷（house servant）であった。

このような奴隷の推定価格をプランターがどのように算出していたかについて、考察する。プランターは、地域内で活動するトレーダーとの直接交渉や、競売・遺産売却の情報、奴隷売却の新聞広告などから価格情報をおおよそ握っていたと考えられる。⁽⁵⁶⁾ そのため、プランターが会計記録に記した奴隷の現金価値は、近隣奴隷市場における実際の価格と大差はなかったと言ってよい。トレーダーは、購入奴隷価格に仲介料・組織収入を上乗せした価格で西部プランターに販売する。Richmondで活動していた Templeman & Goodman というトレーダーの会計記録では購入価格、すなわちプランターの会計記録上の推定価格の約1.2倍から1.5倍の価格で売却されていた。⁽⁵⁷⁾

またプランターは、奴隷の維持費、すなわち奴隷への年々の投資額と近隣プランテーションへの賃貸費をも、推定価格算出の際に考慮したと考えられる。ここでメリーランド州ハーフォード郡の Richard Dorsey の会計記録における奴隷維持費算出方法を説明する。まず、奴隷の子供は、10歳になるまでは1年間に維持費が \$ 10かかり、10年間で \$ 100かかると決める。10歳以下の子供は、生産年齢に達しておらず、収益の見込みはなく、一方的な投資であるといえる。10歳から15歳までは、労働の結果もたらし得る収益と維持費がほぼ同じであると定める。15歳から17歳までは、成人男性の約半分の維持費、17歳から21歳までは成人男性の3分の2の維持費と定めており、21歳以上を成人男性とみなした。成人男性にかかる1年間の維持費は \$ 50と規定しており、その中には衣服費・食費などが含まれていた。以上のような算出の法則を定めていたが、Dorsey は奴隷は15歳以上にならないと投資を超える価値を奴隷は生み出さず、また投資に相応する収益をもたらす年齢を30歳前後が限度であると捉えていたため、15歳以上の投資額から維持費総額を算出し、それに見合う推定価格を決定している。⁽⁵⁸⁾ 例として25歳男性の全投資額算出方法を〈表-10〉に示すが、それは合計額をそれぞれの奴隷について算出し、売却価格・賃貸価格決定の尺度としていた。言うまでもなく、この維持費の算出方法には個別の奴隷の力量・能力、職種などの条件は含まれておらず、それはプランターの有する売却・賃貸情報によって維持費の額に相応の上乗せがされたものといえる。

(55) Morgan, *Slave Counterpoint*, 216-217.

(56) Tadman, *op. cit.*, 49-69.

(57) Templeman & Goodman Account Books, SHC.

(58) Conrad, Meyer, "The Economics of Slavery in the Antebellum South" *Journal of Political Economy* vol. LXVI (April, 1958) では1840-60年代の奴隷の維持費は年平均\$20-21と算出している。

〈表—10〉 Richard Dorsey 会計記録上の奴隷資産の勘定方法

誕生-10歳	1年あたり \$ 10, 計 \$ 100
10歳-15歳	衣食費と同額とする
15歳-17歳	成人維持費額の半分とする
17歳-21歳	成人維持費額の3分の2とする
21歳以上	成人維持費額, \$ 50

出所) Richard Dorsey Papers (1836), MHS.

注) 「維持費」という語はここでは wages の訳。Dorsey 家の奴隷は賃貸されていたのではなく、ここで言う wages はいわゆる雇用費とは異なり、衣食費を含む「維持費」と考えられる。また Dorsey は、15歳以上になるとそれまでの「維持費」を超える「価値」を生むと計算している。

例) 奴隷 Ephraim (男, 25歳) の会計記録上の維持費総額

誕生-10歳	\$ 100
10歳-15歳	衣食費と同額 (15歳までは維持費を超える価値を生産しない)
15歳-17歳	成人維持費 $\{50(\$)\div 2\} \times 2(\text{年}) = \$ 50$
17歳-21歳	成人維持費 $\{50(\$)\div \frac{2}{3}\} \times 4(\text{年}) = \$ 133.33$
21歳-25歳	成人維持費 $50(\$)\times 4(\text{年}) = \$ 200$
	計 \$ 383.33

また、それまでの維持費があまりかかっていなくとも、比較的若い男女の推定価格を高額にしていたことが〈表—11〉によって確認できるが、これは将来の収益を見込んでのことであろう。

賃貸奴隷の貸し出し費もまた、価格決定の重要な要素であったと言われる。⁽⁵⁹⁾ただし、貸し出し期間は1年間の場合もあれば、収穫期だけの数週間、中には熟練奴隷の場合には、数日のみの短期間の貸し出しなども活発に行われていたので、貸し出し費と推定価格の比較を行うには史料的に限界がある。ここでは、賃貸された奴隷に関する借り手側のプランテーションで要した費用について見る。〈表—12〉には同じくヴァージニア州の White Hall プランテーションにおいて1年間の奴隷の賃貸にかかる借り手の費用が算出されている。男性奴隷は賃貸費が \$ 70 であり、これは賃貸奴隷の1年間の費用としては比較的高額の部類に入り、何らかの熟練技術を持っていた可能性が高い。実際、ダイドウォーター地域の Grimes 家では所有奴隷を売却せずに全て賃貸していたが、1827年から1837年の10年間に貸し出された全奴隷、のべ254人のうち、賃貸費が \$ 70 を超えたのはわずか12人しかいない。⁽⁶⁰⁾一方、女性の雇用費 \$ 20 は、平均的な額である。なお Grimes 家は、毎年約25人

(59) Gray, *op. cit.*, 473.

(60) Grimes 家文書, SHC.

〈表一11〉 Richard Dorsey 家の奴隷維持費とプランターによる推定価格 [1845年]
(\$)

奴隷 (名前, 年齢)	維持費総額	Dorsey による推定価格
Ephraim, 25	383.33	500
Henry, 32	633.33	500
Amos, 30	533.33	300
Asenath, 22	233.33	300
Sally, 20	149.99	350
Sam, 19	116.66	500
Alfred, 21	183.33	500
John, 20	149.99	500
Emily, 16	50.00	400
Robert, 12	—	300

出所) Richard Dorsey Papers (1845), MHS.

注) 30歳の Amos の推定価格が維持費算出価格を超えないのは身体的欠陥があったからである (not sound の記述)。Asenath と、Sally は女性であり、Dorsey による推定価格は低く、Sam, Alfred, John は若い男性で、維持費より大幅に高い推定価格を示している。

〈表一12〉 黒人奴隷 (賃貸奴隷) にかかる年間雇用費 (\$)

男性黒人奴隷

雇用費	70.00
豚肉	10.00
靴	2.00
とうもろこし週 1 ½ peck 1 年で19ブッシュェル	11.40
ブランケット (2 年で1枚)	1.50
オスナブルク 6 ヤード (ズボン用) ヤード単価14¢	0.84
オスナブルク 8 ヤード (シャツ用) コート地 6 ヤード	3.60
資産課税	1.20
医療費	5.00
住居費及び薪費	3.86
計	109.40

女性黒人奴隷

雇用費	20.00
豚肉	5.00
靴	1.25
とうもろこし	7.41
ブランケット (2 年で1枚)	1.00
オスナブルク (シャツ用) ヤード単価 8 ¢	0.36
オスナブルク (夏用ワンピース)	0.98
資産課税	1.00
医療費	1.18
住居及び薪費	3.48
計	41.66

出所) White Hall プランテーション文書 (1836), SHC.

出所) White Hall プランテーション文書 (1836), SHC.

の奴隷を全て賃貸し、年平均\$ 500~600をその賃貸収入であげていた。

これまでに会計記録上の奴隷資産の扱いについて、奴隷価格の勘定、奴隷の賃貸を中心に見てきたが、ここで奴隷売却がどのようなかたちで行われていたを具体例で示す。奴隷の売却はこれまで、東部海岸地域のプランターにとって重要な収入源で、売却収入への依存度は非常に高いと考えられてきた。ここでメリーランド州ハーフォード郡の Posey 家の会計記録を再び分析する。Posey 家は、19世紀以降、タバコに加えて、小麦をステーブルとして栽培し、それぞれのもたらず農業利益を主要収入としていた。しかし、1830年代から所有奴隷の売却と賃貸を開始し、その開始は農業収入と大きく関連していた形跡がある。〈表-13〉は、1850年代における Posey 家の所有奴隷の推定価格と奴隷の売却・賃貸の記録を示したものである。また〈表-14〉は、同じ時期の Posey 家にお

〈表-13〉 Posey 家の奴隷の売却および賃貸価格 [1851-1859年]

(\$)

奴隷 (名前)	年 度								
	1851	1852	1853	1854	1855	1856	1857	1858	1859
Jacob	500	600	600	600	700	700	700	400	400
Henry	300	300	200	300	300	300	300	300	100
John	300	500	*	700	1000	売却?			
William	500	650	*	900	1000	1000	1000	900	1100
Frances	500	650	*	900	1000	1000	1000	800	1100
Milly	500	600	500	500売					
Cela	300	350	*	500	600	800	800	600	900
Michael	350	350売							
Lucy	500	600	400	400	*	500	売却?		
Henrietta	500	600売							
Hillary	150	250	300	400	500	*	600	600	900
Stephen	150	200	200	400	500	600	600	600	1000
Susan	500	600	500	600	300	600	600	500	500
George	350	500	500	700	800	800	1000売		
James (Jim)	200	400	450	500	600	600	1000売		
Betty Ann	150	200	*	400	500	500	600	500	800
Theodore	50	100	200	200	200	売却?			
Alexios	50	100	200	200売					
Teresa	50	50	50	100	100	200	300	300	400
Sarah Clare	50	75	100	100	100	200	300	300	500
Robert	50	75	50	*	*	200	300	300	500
Mildey		400	*	500	600	600	800	600	1000
John Thomas		50	50	50	75	200	200	200	400
Mary Jane				50売					
Charles					50	*	100	100	200
Dory						400	500	500	500

出所) Posey 家文書 (1851-1859), MHS.

注) 表中の「売」は売却価格を示す。それ以外は売却推定価格である。

*は価格が記されておらず、数年単位での賃貸が考えられる。Milly と Mary Jane は親子である。John, Lucy と Theodore は、売却あるいは長期に渡る賃貸が考えられる。

〈表—14〉 Posey 家の収穫高と収入

	1851	1852	1853	1854	1855	1856	1857	1858	1859
タバコ (ホッグスヘッド)	16	7	3	4	5	13	8.5	11.5	9.5
タバコ (価格 \$)	*	*	*	111.62	245.59	614.06	658.90	*	266.89
小麦 (ブッシュェル)	1250	293	*	464	690	241	505	254	500
小麦 (価格 \$)	*	*	*	541.22	1054.90	349.93	481.62	*	601.57
総収入 (\$)	3390	1824	1306	1775	1345	1125	3467	1039	977

出所) Posey 家文書 (1851-1859), MHS. 注) *は無記入。

けるタバコと小麦の収穫高と農業収入を示したものである。まず〈表—13〉から判明することをいくつか挙げる。奴隷の年齢については記載がないが、上位に記載されている奴隷は生産年齢にあたり、William, Francesあたりがピークを示していると考えられる。JacobやHenryはおそらく比較的高齢の奴隷であり、また中段あたりのStephen, George, Jamesは若い、年が立つにつれて推定価格が上がっており、10歳代後半から20歳代に差し掛かる頃であったと想像できよう。また下位に記されている推定価格の低い奴隷は生産年齢に達していない子供であると判断できる。これら2つの表を比較すると奴隷の売却がステーブル収入の増減と密接に関係していることが判明する。すなわち、Posey家では奴隷の売却は、作物生産高が低い年度において農業収入を補う形で行われている。推定価格の高い奴隷は\$1000にもなるので、一度に大量の奴隷を売却しなくても数人で十分な収入になる。また、1853年度、1855年度、1856年度においては、奴隷の賃貸によって収入を補っていたことが分かる。Posey家では、売却の決定は前年の収入が決定要因になったと言え、収入の低い年度の翌年は比較的高額の奴隷が売却されているケースが目立つ。1852年は例外的に多く見えるが、前年に大量の奴隷を賃貸しており、収入の多くはその賃貸費にあてられた。

一方、奴隷の賃貸は、農業収入を補う緊急で臨時的な措置であり、賃貸は近隣のプランテーションに貸し出す場合がほとんどで、当人同士の交渉で契約が成立するため、農業収入の見込みが低い年度に、その年度内に実行することが可能であった。しかし、売却の場合には、トレーダーが間に入るため、所有者の前もっての売却の意志と判断およびトレーダーによる査定等が必要となり、緊急に実行できるものではなかつた。⁽⁶¹⁾

(61) 一度に多くの奴隷を賃貸していない(Grimes家と対照的)ことから、作物生産への比重の高さが示される。トレーダーの査定について、Tadman, *op. cit.*, 113-132.

なお、1858および1859年度は以上の説明に反して賃貸も売却もその形跡がないが、1854年に Posey 家は新しく Mount Pleasant 農場の開墾を始め、この頃までには新しい農場での収入が安定してきたため、ホーム・ファームの農場収入が低くても特別な措置を取らずに済んだと考えられる。

Posey 家の特徴は、アンティベラム期を通して最後まで奴隷売却への依存を深めず、タバコと小麦の両ステープルの生産をプランテーション経営の中心に置いていたことである。奴隷の売却がプランテーション経営の一部に組み込まれていたのは確かであるが、奴隷売却は毎年行われたのではなく、農業収入に応じて不定期に行われる、補完的なものであった。これは「タバコ（小麦）生産—奴隷売却サイクル」とも言うべき経営で、プランテーション経営の安定化を図るひとつの手段であったと言える。⁽⁶²⁾

東部海岸地域のプランターの会計記録に現われる奴隷は、プランターの経営の中で奴隷がどのように扱われたのかを具体的に示している。アンティベラム期に見られた東部の諸変化とともに経営上、奴隷を扱う方法は多様化した。奴隷資産の扱いにはそのプランターの経営の特色が現れ、その経営を最も左右したと言っても過言ではなかったのである。

第5章 結論

アンティベラム期の東部海岸地域は、これまで、西部綿花地帯の奴隷需要に応じる供給地、すなわち「奴隷生産地」として認識されていた。18世紀半ば以降生じた奴隷労働管理システムの変化、生産多様化に対する対応などの大きな変革期を迎え、東部海岸地域は、混乱の中で19世紀へ突入して行ったと言える。19世紀のこの地域のプランテーションがどのような経営状況にあったかを判断するのに、会計記録等の農場記録は、多くの事実の再確認と新たな事実の発見を可能にする。とりわけ、奴隷資産をどう扱うかが当時のプランターの最重要項目であり、会計記録から浮かび上がる奴隷こそが、プランターが望んだ経営の枠内における奴隷身分の姿であったと言えよう。

本論の結論として、チェサピーク・タイドウォーター両地域における奴隷の、「組」労働から「課業」労働への移行が、熟練奴隷の増加傾向と一致し、そのことと関連して熟練奴隷の資産価値・売却価格の上昇が見られたことをまず指摘できよう。また、個別事例から、奴隷の売却が従来言われていたように組織的あるいはその収入に大幅に依存して行われていたのではなく、農場収入の不安定さを均衡させる行為として行われていた例を指摘できた。これらの事実は大量のデータ分析では発見し難い事実であり、経済的に困窮していた東部海岸地域のプランターが経営の建て直しのため

(62) これに類する結果がヴァージニア州チャールズ・シティ郡の Carter 家のプランテーション (Shirley Plantation Records, Library of Congress 所蔵)、ヘンリー郡の Hairston & Wilson 家文書 (SHC 所蔵) などで確認されているが省略する。

にあらゆる戦略を取っていた事を示しており、その熱心さが伺えよう。

東部海岸地域のプランターが、西部への大移住時代到来の中で東部に留まり、経営の立て直しをはかった経緯を分析することにより、西部発展の中、南部においても特に「没落地域」と言われる当該地域の辿った経緯を伺い知ることができる。アンティペラム期の大プランターは、これまでは有閑的で経営に熱心ではないという固定観念が定着していたが、それは断定できるものではない。地域として一つの定まった方向に向かってはいたわけではないが、経営のあり方が多様化していたことは、個々のプランターの経営の危機への柔軟な対応力を示している。アンティペラム期における東部海岸地域は、「没落地域」から脱却して、経営危機を乗り越え得る堅固な社会の建設を模索していたのである。

(経済学部研究助手)